比叡山時報

発行所
比叡山時報社
jihoh@deluxe.ocn.ne.jp
大津市坂本本町4220
郵便番号 520－0116
電話　077－578－0001
振替　00970 －2－ 9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報
叡山講福聚教会
会　報
年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

壬寅

ご購読はこちらから

新年令和４年壬寅（みずのえとら）の歳を迎えました。本年が皆さまにとって良い年でありますことを、心からお祈り申し上げます

令和３年は、オリンピック、パラリンピックの開催と新型コロナ感染症の拡大の中、難しい判断が迫られ、人々の心も選手たちを応援する気持ちと、感染の広がりに心配な気持ちの狭間で矛盾を抱えたまま、苦しい日々を過ごしました。

延暦寺でも伝教大師さまの大遠忌の年を迎えて、計画していた法要や行事は中止や縮小が続きました。６月３日から３日間の大遠忌御祥当法要は山内の出仕のみで行いましたが、法要の中に映像と音声での参加をお願いし、また法要の映像を同時配信して全国の方にご覧頂き、さらに、ネット上でいつでも見て頂けるという今までにない発信の方法をとることができました。９月からは、伝教大師のご遠忌に相応しく、大師の想いの深い戒壇院と法華総持院東塔の特別拝観を実施し、特に10月以降は感染症の沈静化も見られ、また広報の効果もあって多くの皆さんの参拝を頂くことができました。

東京では、国立博物館で特別展「最澄と天台宗のすべて」が開催され、それに伴うマスコミからの情報発信も多くなされました。通信技術の革新と一般への普及が加速的にすすむ中、私たちは、コロナ禍の中での宗祖の大遠忌を機会に、新たな社会参加の方法、人との交流を経験しているようです。

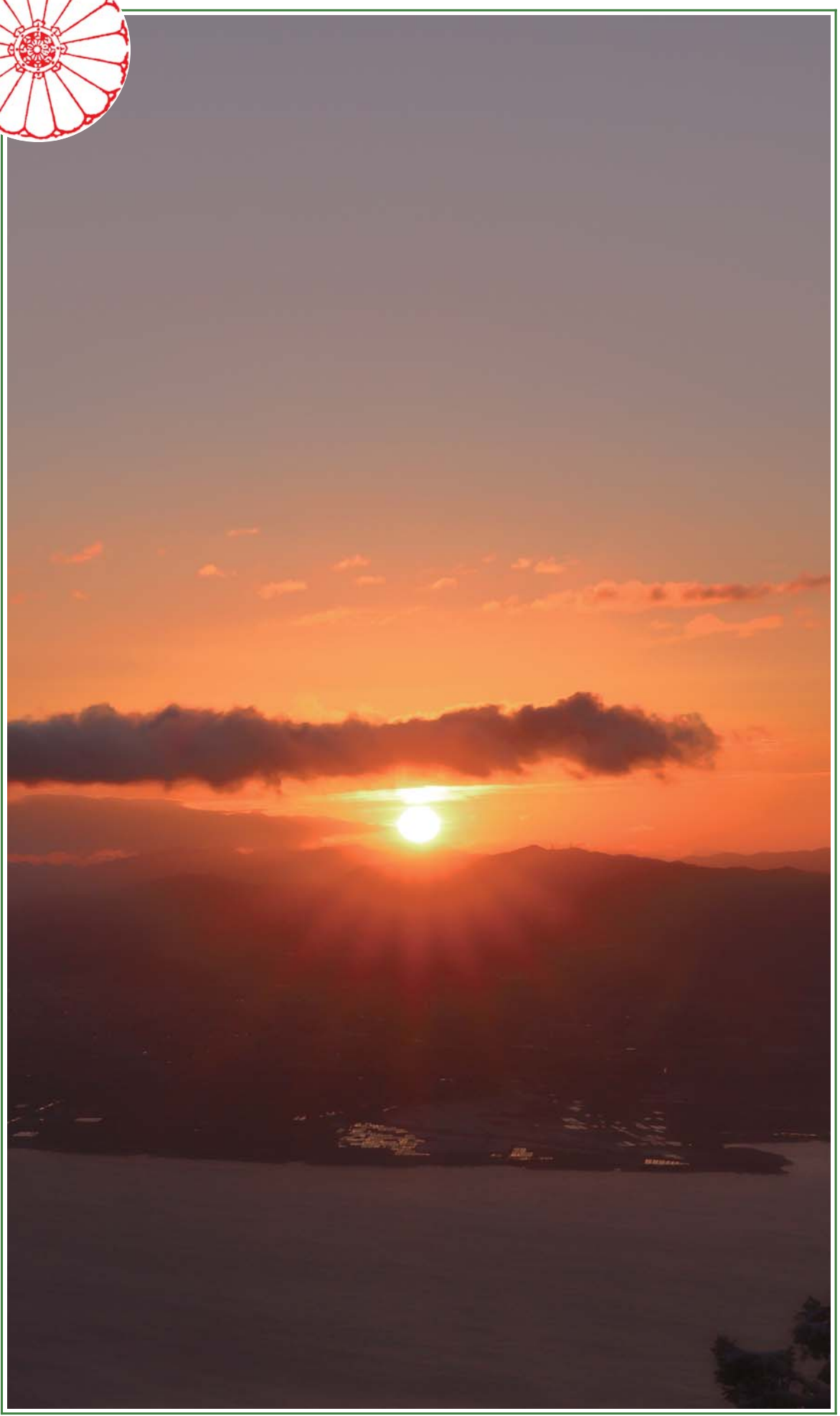
新しい年、令和４年はどのような年となるのでしょう。天台宗では宗祖の大遠忌までの10年間の大法会期間をコロナ禍を受けて１年延長して、令和４年度いっぱいを大遠忌報恩の期間としています。50年に一度の大遠忌の報恩の参拝と共に、60年ぶりの総本堂根本中堂の大改修の様子も見届けて頂きたいと念じております。

新型コロナの感染はどのようになるのか、予断を許しません。行動の制限、自粛も必要でしょう。しかし辛抱したり我慢ばかりでは続けることができません。

菩薩の修行は六波羅蜜と云われます。その中に忍辱波羅蜜（にんにくはらみつ）があります。精神的身体的苦痛、苦難に耐え忍ぶことです。その苦痛は、人から受ける場合と人ではなく自然環境や身体的な、老いや病からの苦痛もあります。菩薩には、それら苦痛を唯々堪える辛抱することが求められているのかというと、そうではないと思います。忍には認める、認めて確かに知ること、体得する、などの意味があります。仏教の説く真理を体得した境地を忍と云い、その時にはもうそこから退き戻ることはないという行位（不退転位）に到達しているとされます。

忍耐が欲求を押さえつけてのものであれば、何らかのひずみや無理が生じて自暴自棄に走る事にもなるでしょう。ではなく納得する。それも頭だけではなく経験的にも体得するということがあって本当の忍波羅蜜と云えるでしょう。

私たちの行動自粛の辛抱はまだ続きます。精神的な苦痛にも耐えなければなりません。しかし、無理な我慢ではなく、しなやかな忍、柔和（にゅうわ）忍辱（にんにく）の心をもって冷静に新たな道理も認めて、体験し、適切な行動ができるようにしたいものです。



延暦寺会館より拝するご来光（令和３年１月１日）

新しい年を柔和忍辱の心で

伝教大師のお志を次世代につなぐ

伝教大師一千二百年大遠忌

受け継がれる大師のご精神
現代に「志を述べる」活動を紹介

昨年はコロナ禍のなか、宗祖伝教大師一千二百年大遠忌の年として、中止を余儀なされた行事があったにも関わらず、主要な法要・行事を奉修することができました。また、年が明けた本年も伝教大師の精神を後世に伝えるべく、様々な取り組みやプロジェクトが進行しております。今特集では、その一端を紹介しながら、宗祖伝教大師最澄上人が述べられた「我が志を述べよ」というご遺志を皆さんと一緒に味わいたいと思います

天台宗の発展に大師の理念

「我が志を述べよ」

天台宗内でよく耳にするこの言葉は、宗祖伝教大師最澄の弟子である別当大師光定が記した『伝述一心戒文』の中に出てきます。

伝教大師はご遷化される際に「我が急に仏を作る勿れ、我が急に経を写すこと勿れ、我が志を述べよ」と遺言を残されたというのですが、文章における表面上の意味は決して難しくはありません。「私が亡くなった後、私を供養するために仏像を造る必要はない。私の供養のために経典を書写する必要はない。ただ、私の志を実践して後世に伝えて欲しい」とおっしゃっているのです。しかし、これを本当に実行するのは、大変難しいと思います。そもそも、伝教大師の「我が志」とは何なのでしょうか。

「山修山学」「十二年籠山」「忘己利他」「一隅を照らす」「菩薩僧の育成」「法華一乗」「国家の安寧」など、伝教大師が示された道筋は数多くあります。これらの理念を真摯に受け取り、それぞれのやり方で伝教大師の想いを紡いできた結果、比叡山延暦寺・天台宗は発展し、鎮護国家の道場として広く世に知られることとなりました。台密の興隆、天台教学の進展、鎌倉期における祖師方の輩出など日本仏教に大きな足跡を残しただけでなく、時には織田信長による焼き討ちや明治維新期の神仏分離といった危機も乗り越えて来ました。様々な時代背景や民衆のニーズに影響を受けながら、その当時の方々が一

昨年６月４日に厳修された伝教大師一千二百年大遠忌御祥当法要の様子

一隅から志を述べる

その薫陶は今でも生き生きと厳修されました。芸能界からは比叡山親善大使を務める森友嵐士氏が、比叡山にて毎年開催している「祈りの集い」において大遠忌御祥当に合わせ作成したメッセージを奉読されました。

また学府からは大久保良峻（伝教大師最澄）（法蔵館）、久保智康・宇代貴文『もっと知りたい中心に参拝・見学・修行体験等を行い、伝教大師のご遺志を学びながら意見を交わし合いました。

御祥当法要では歌舞伎俳優市川猿之助氏によるメッセージも奉読された

十二年籠山行を修する僧侶と市川氏による鼎談

寺庭婦人連合会役員による大遠忌報恩法要での宗歌の奉納

生懸命に考え、「大師の志」を胸に抱きながら邁進してきたと云えるでしょう。

宗外からも大師の志が

さらに天台宗外においても、前川健一『現代語訳 顕戒論』（公益財団法人東洋哲学研究所）、大竹晋『現代語訳 最澄全集（全四巻）』（国書刊行会）、師茂樹『最澄と徳一』（岩波書店）、別冊太陽『最澄と天台宗のこころ』（平凡社）、等が刊行されました。

これらは、現在までの研究成果に基づいたものであり、伝教大師のお考えや天台宗の意義を改めてふり返るのに大変有益です。特に大竹晋氏のお仕事は、天台教学のみならず、他宗の教義を踏まえた上で伝教大師の著作が丁寧に現代語訳されており、これまでになかった貴重な資料集と云えます。

また、東京国立博物館・京都国立博物館・九州国立博物館の巡回展で開催されている伝教大師1200年大遠忌記念特別展「最澄と天台宗のすべて」では、伝教大師ゆかりの様々な仏像・絵画・資史料や、大師のご精神に基づき具現化され、各地で大切に守り継がれてきた名宝を目にすることが出来ます。

大遠忌を記念して別冊太陽『最澄と天台宗のこころ』を発刊

大遠忌を記念し伝教大師1200年魅力交流委員会（鳥井信吾委員長）が発足。大学コラボプロジェクトでは、大学生が比叡山上山下で色々な体験や活動を行った

研究の成果を次世代へ紡ぐ

次の100年にむけて

このような様々な活動は、まさに大師が望まれた「我が志を述べよ」を実践している証でありません。伝教大師は、国を守ること・人々が幸せになることを目指して、法華一乗の理念を体現する人材育成システムとして比叡山延暦寺を開かれました。そのご生涯は、人々の心の安寧を支える「国宝」となる人材を未来へ送り出すことに、最後まで心血を注がれました。

年経った今、これほど多くの方々が、己の信じるやり方と、己の出来る範疇で、誠心誠意「志を述べている」姿をご覧になられた伝教大師は、一体何とおっしゃられるのでしょうか。

今大遠忌を経て、次に我々がしなければならないことは、次世代へ「志を述べる」姿を継承させていくことです。大師の一千三百年大遠忌までの100年は今年から始まるのです。

全国から教区宗務所長と法流の代表者が総出仕で一堂に会し、伝教大師に報恩の誠を捧げた